

2016 年度血液透析患者実態調査からみた 透析患者の現状と課題

氏 名：榊原 靖夫
所 属：全国腎臓病協議会

○プロフィール



一般社団法人 全国腎臓病協議会 理事
NPO 法人 東京難病団体連絡協議会 理事長
透析歴 22 年

○発言要旨

<はじめに>

- 末期腎不全の治療法として、人工透析（以下透析）および腎移植が確立している。
- とりわけ透析は、年齢や性別、社会的立場や所得に関係なく、誰もが受けることができる治療となり、多くの患者が職場や家庭に戻り、社会的役割や自己実現を果たすことができるようになった。
- 透析患者数は 32 万 9,609 人、平均年齢は 68.15 歳（2016 年末現在、日本透析医学会調べ）。
- 今を生きる透析患者の実態と課題について、全腎協が日本透析医会と透析研究会と共同して行った 2016 年度血液透析患者実態調査からその一部をお伝えしたい。

<血液透析患者の姿>

▼介護が必要な透析患者

- 75 歳以上の患者は日常生活に手助けが必要に（13.6%）。
- 週 3 回の通院は「くたびれる」（28.3%）。通院費用が毎月 1 万円以上かかる（13.8%）。通院に付添ってもらえる人は配偶者（46.1%）。

▼高齢だけれど判断能力を失っても私は生きたい

- 70 歳以上の患者は判断能力を失っても「透析は続けたい」が「中止」を上回る。
- 事前指示書は「必要」だ（59.8%）

▼暮らし向きは苦しい

- 60 歳未満の現役世代の 4 割弱が苦しい。
- 年金と手当を受給しても年間 100 万円以下の低所得者は 3 人に 1 人。

<おわりに>

- 1971 年当時、実際にあった「患者の選択基準」。
- 病状が進行、あるいは合併症などから腎不全となる疾患は多岐にわたる。難病・長期慢性疾患をもつ患者・家族の皆さんとともに、共通した諸課題に取り組んでいきたい。